

幼児教育におけるコーチングの活用

桜美林大学名誉教授
NPO 法人ナチュラルトリートメント臨床発達心理士
森 和 代



コーチングと聞くと真っ先にスポーツコーチを思い浮かべるのではないのでしょうか？アスリートを育成するコーチングスキルの成果が、1990年代アメリカでビジネス研修に活用され、広まりました。個人には本来無限の可能性があると信じ、その価値を認めて潜在能力の扉を開き、最大限に力を発揮できるように伴走し、後押しする方法がコーチングです。一方的に教えるのではなく双方向の対話を重ねて、対象者が目標達成に必要なスキルや知識、考え方を備え、行動することを促進します。コーチングは近年オーストラリアをはじめ幼児教育の分野でも注目されるようになりました。

長年子どもの動機づけ研究を進めてきた筆者は、その有効性に注目し、幼児を育てている養育者や、幼稚園教諭を対象に、初歩的なコーチングの入門ワークショップを行い、効果検証を行っています。

ワークショップの内容は、まず簡単なアイスブレイキングの後、コーチングの概要を説明しました。次に基本スキルである、聴く、質問する、承認する、について説明し、モデリングを示した上で、参加者2人ずつのペアで、ロールプレイの体験を行いました。聴くスキルでは、場面を想定してまずできるだけ感じの悪い方法で聞くワークを行い、聞いてもらえない気持ちをシェアしました。いやな気持ちにさせる感じの悪い聞き方の要因を考え、心を開ける聞き方を検討し、傾聴スキルを用いた聞き方で再度ワークを行って気づきを促進しました。質問するスキルは、詰問にならないように注意して相手の頭の中の漠然とした考えをより具体的にするために多様な答えを可能にする開かれた質問を投げかけて潜在

力を引き出し、視点を変えて新たな可能性を見出すことを支援するスキルです。スキルの解説の後、食事時の離席などの場面を想定して多様な質問のロールプレイを行いました。そして片づけをしない子どもの場面などを想定して質問をした上で本人なりの努力を承認してほめ、提案を引き出して行動修正を促すワークを行いました。ワークショップの前と比較して後には、質問、承認など効果測定の項目群全て、今後行える自信が有意に向上しました。参加の感想では、ワーク実施による気づきの促進や、ワークを通してコーチングの基本的な働きかけの有用性を実感し、今後の教育に活かしたいという意欲が、多く示されていました。

情報化が進んだ現代社会では、子どもにどう関わるべきかについてのさまざまな情報が、メディア上にあふれています。子どもの訴えを受け止めることや、豊かなコミュニケーションの重要性は十分理解しているものの、日常の慌ただしさに流されて、できない自分をネガティブに捉えがちです。ワークをとおして共感し、受け止めてもらえる心地よさを体験し、パーフェクトに対応できなくても、1日1回でも双方向に働きかけ合うことへの指向性が高まると期待できます。子どもに働きかける側のコーチ自身もあるがままの自分を承認し受け入れ、ポジティブな姿勢でじっくり関われるよう自分に向けたセルフコーチングを行うことも推奨されます。

今後さらに実践を進めて行きたいと考えております。近年コーチングのさまざまな参考図書も出版されておりますので、ご活用されて現場に活かされることを期待しております。